

# 平成二十八年 論語に学ぶ人間学セミナー

好評を受けて今年で六年目に入った論語セミナー。今年からは、「仮名論語」に加えて、「男の風格をつくる論語」(伊與田 覺著 致知出版社)をテキストに学んでおります。後半の講義は、三木英一先生の人生を熱く語っていただき、本物人間に学ぶセミナーとして十二月までの講座となっております。いつからでも参加できますので、別添お申込書にて申し込みください。

第四回の内容を少しだけ紹介させていただきます。まずは仮名論語の素読からになります。

## 仮名論語 憲問第十四

子曰のたまわく、天を怨みず、人を尤とがめず、下學かがくして上達す。

我を知る者は其れ天か。

先師(孔子)が私を知ってくれる者がいないと嘆かれた場面。弟子の子貢が「先生のような方が世に知られないということがありませんか」と言い、先師が答えられた。「私が知られていないからといって、天を怨んだり人をとがめたりしない。身近な低いことから学び、だんだんと天理にしたがい高いところのぼってきたのだ。私を本当に知っている者は天かなあ」孔子は人間にとって一番大切なことである、天に恥じない、まことをつくして生きることを貫いてこられました。

## 「男の風格をつくる論語」(伊與田 覺著 致知出版社)

### 第二講 孔子の心を伝えるものたちー顔淵と曾子

孔子は五十にして天命を知り、不退転の境地に達しました。その心境を会得しそうなのが弟子の顔淵でしたが孔子が七十の頃に亡くなってしまいます。その時の心情を「天予を喪ぼせり、天予を喪ぼせり」といって泣き崩れてしまいます。その後、新たな弟子を見出しました。それが曾子です。曾子は孔子が教えを説くと必ず起立して目をしっかりと見て答えていたそうです。目は言葉より人の心を表すもの。言葉は時としていい加減な時もある。心を以って相手の心に伝えていくこと。これこそ以心伝心です、

## 三木英一先生の人生講話 「一隅を照らす」

今いるその場所・おかれた環境で、精一杯で努力し、光り輝くこと。

住友電工中興の英主と称えられた田中良雄さんが綴られた詩を紹介して頂きました。

### 私の願い

「一隅を照らすもので私はあるたい

私の受け持つ一隅が

どんなに小さいみじめな

はかないものであっても

悪びれず

ひるまず

いつもほのかに

照らしていきたい」

そのほかにもたくさんの方の講話をして頂きました。この人間学セミナーで学び、少しでも良い影響を及ぼしてゆけるよう、一隅を照らす人間を目指していきたいと思えます。皆様も是非、ご参加ください。

次回 第五回は、六月八日(水) 午後六時三十分からです。